

日本におけるサービス・ラーニングの展開 (8)

——部活動連携型奉仕体験活動による 態度と行動の変化について——

大東 貢生^{*1} 古川 秀夫^{*2}
柴田 和子^{*3} 山田 一隆^{*4}

Development of Service Learning in Japan Part 8 : For Changes in Attitudes and Behaviors by Service Activities Linked with Extra-curricular Activities

Takao OTSUKA^{*1}, Hideo FURUKAWA^{*2}
Kazuko SHIBATA^{*3}, Kazutaka YAMADA^{*4}

We examined high school students have taken a service learning. And we analyzed changes in there attitudes and behaviors they think.

It is as follows : a result of the three surveys in the Tokyo Metropolitan High School.

①Students who have taken a service learning enhance ability to group activities, communication skills, problem finding and solving skills, self-esteem, normative consciousness and public mind. On the other hand, they do not enhance ability to facilitate the human relations, think strategically, sympathize with others and find the joy that is obtained by help of others.

②Students who volunteered before to take a service learning has better attitudes and behaviors than students who do not volunteered. And, after taking a service-learning, they related degree of there own understanding of the pre-learning and post-learning with there attitudes and behaviors.

③After taking a service-learning, even they volunteer, they do not so much change the attitudes and behaviors.

キーワード：サービス・ラーニング，必修科目，中等教育，奉仕

1. 問題の所在

この小論の目的は、サービス・ラーニングを通じた態度や行動の変化について、東京都立 C 高等学校の教科「奉仕」受講者に対するアンケート調査から検討することにある。サービス・ラーニングとは、地域社会のニーズに応じた社会貢献活動に学習者が実際に参加・参画することで、地域社会に対する責任感等を養う教育方法である（富川拓他 2008 : 9）。

我々は、日本へのサービス・ラーニングの展開について先行研究に基づき 7 分類を行い、課題と

*1 佛教大学社会学部准教授

*2 龍谷大学国際学部教授

*3 龍谷大学社会学部兼任講師

*4 岡山大学地域総合研究センター准教授

して①サービスの提供側である「学生・大学」とサービスの受け手側である「地域住民・行政・福祉団体・NPO 団体などの外部セクター」との間で、サービス・ラーニングに対する共通理解が形成できていない点、②日本でのサービス・ラーニングには受け入れ側、つまり地域住民や外部セクターに対してサービスを提供するという意識がない、もしくは薄いという2点を指摘した（富川他2008：16）。

ここで事例とする東京都立高等学校の教科「奉仕」は、東京都教育委員会が平成16年4月に公表した「東京都教育ビジョン」の提言を受け、平成17年度の重点事業として「奉仕体験活動の必修化」が位置付けられ、平成19年度からすべての都立高等学校で東京都設定教科・科目「奉仕」を必修化したものである（東京都教育庁指導部高等学校教育指導課2006：i）。

したがって教科「奉仕」をサービス・ラーニングとして捉えた時に、①サービス対象者とサービス提供者に同等の恩恵があるのか、②教育機関と行政・福祉団体・NPO 団体などの外部セクターとの関係性、またサービス・ラーニングを受け入れる地域社会との関係性、③多文化共生や異文化理解との関係性、④市民性、特に東京都教育委員会のいう「生徒の規範意識を高め」「地域や都民が学校への理解を深め、学校への信頼をいっそう高めていく」（東京都教育庁指導部高等学校教育指導課2006：i）ことにつながっているのかどうかを検討することが必要である¹⁾。

教科「奉仕」の必修化から10年を経過したことを踏まえ、以下では、特に教科「奉仕」導入による生徒への影響について、都立C高等学校にて教科「奉仕」受講生に行ったアンケート結果から、上記③や④について検討したい²⁾。

2. 調査の概要

本調査は都立C高校の教科「奉仕」の受講生に対して、「奉仕」活動の事前と見込まれる2011年7月（事前調査）と、事後と見込まれる同年12月（事後①調査）及び、「奉仕」活動実施1年後の2013年2月（事後②調査）に、担当教諭等が、質問紙をホームルームなどで配布し回収する方法で実施した。したがって本調査は全数調査である。有効回収数は、事前調査180票、事後①調査194票、事後②調査187票である。結果はSPSS 23で分析を行った。

C高校は東京近郊にある歴史のある学校である。教科「奉仕」の科目名は「社会貢献」。履修学年は1年次である。教科「奉仕」導入以前に学校設定教科の科目として「ボランティア」があり、教科「奉仕」実践校として応募している。教科「奉仕」は事前学習11時間、奉仕体験活動18時間、事後学習6時間の計35時間で1単位となっている。開講時限は土曜日の3・4時間目である。また、教科「奉仕」の運営は開講年次である1年生の担任を中心になされている。奉仕体験活動の受け入れ先は部活動単位で開拓されており、奉仕体験活動も部活動単位で行われていることが多い。したがってC高校の教科「奉仕」の特徴は「部活動連携型」と考えられる。奉仕体験活動先は保育・学校施設、高齢者施設、地域の夏祭りの手伝い、通学路清掃・公園整備などである。事前学習や事後学習は担任団を通じ綿密に運営されており、事後学習終了時には受け入れ団体も参加した成果報告会が実施され、受講生が作成したスライドによる口頭発表を行っている（大東他2010）。

3. 結果と考察

3-1. 態度と行動についての単純集計

受講生が教科「奉仕」の「学び」についてどのようにとらえているのかについて、事前調査、事後①調査、事後②調査の3回にわたって受講生に同一の質問を行った。質問は、立命館大学が採択を受けた文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）「地域活性化ボランティアの深化と発展」（2005-08 年度）の一環で設置された「ボランティア・サービスマーケティング研究会」によって開発され立命館大学での調査に用いられた項目に加え（山田一隆・井上泰夫 2009 a 2009 b）、菊池章夫（1988）が提案する「社会的スキル（KiSS-18）」のうちから本調査の趣旨に沿う7項目を追加し（菊池章夫・長濱加那子 2008）、さらに経済産業省の社会人基礎力の項目を勘案し、「身近な地域に関心がある」「人との出会いがある」「人から感謝される」「自分に自信がない」「ものごとを計画的に進められる」「グループで活動することができる」「社会の仕組みやルールについて知っている」「毎日が充実している」「自分の考えや思いをうまく表すことができる」「将来や、やりたい仕事のイメージがある」「この高校の生徒の評判はよいと思う」「さまざまな問題を解決する力がある」「人間関係をうまく持てる」「会話がとぎれてしまう」「人を助けることがうまくできる」「自己紹介がうまくできる」「感情をおさえることができる」「問題を見つけることができる」「目標をうまく立てることができる」「社会的に弱い立場の人の気持ちがわかる」の20項目を考案

表1 教科「奉仕」の態度や行動についての平均値の単純集計（加重平均）

	調査回		
	事前	事後①	事後②
身近な地域に関心がある	4.04	3.92	3.98
人との出会いがある	4.37	4.36	4.23
人から感謝される	4.17	4.16	4.16
自分に自信がない	4.06	3.87	3.91
ものごとを計画的に進められる	3.42	3.47	3.46
グループで活動することができる	4.36	4.49	4.40
社会の仕組みやルールについて知っている	4.02	4.14	4.21
毎日が充実している	4.25	4.38	4.39
自分の考えや思いをうまく表すことができる	3.90	3.93	3.97
将来や、やりたい仕事のイメージがある	3.87	3.95	4.46
この高校の生徒の評判はよいと思う	3.91	4.05	3.88
さまざまな問題を解決する力がある	3.79	3.97	3.94
人間関係をうまく持てる	4.07	4.17	4.14
会話がとぎれてしまう	3.59	3.44	3.69
人を助けることがうまくできる	3.80	3.80	3.87
自己紹介がうまくできる	3.74	3.66	3.68
感情をおさえることができる	4.30	4.34	4.30
問題を見つけることができる	4.14	4.27	4.31
目標をうまく立てることができる	3.86	3.91	4.04
社会的に弱い立場の人の気持ちがわかる	3.95	3.93	3.94

した。また選択肢は「非常にそうだ」「かなりそうだ」「ややそうだ」「やや違う」「かなり違う」「非常に違う」の6件法とした。最高点は6点、最低点は1点、平均点は3.5点である。調査回ごとの質問の平均値は表1の通りである。また図1では質問ごとの平均値をグラフにした。

全体を通じ、数値が高い(4.20以上)項目は「人との出会いがある」「グループで活動することができる」「毎日が充実している」「感情をおさえることができる」「問題を見つけることができる」である。逆に数値が低い(3.70以下)項目は「ものごとを計画的に進められる」「会話が途切れてしまう」「自己紹介がうまくできる」である。このことからC高校教科「奉仕」受講生は、受講前から毎日が充実してグループ活動で会話ができて感情を抑えつつ問題を見つけることができるが、ものごとを計画的に進めることが苦手であり人との出会いはあるが自己紹介が苦手であるという傾向があるようである。

体験前(事前調査)と比較して体験後(事後①調査)の数値が高くなったのは、「グループで活動することができる」「社会の仕組みやルールについて知っている」「毎日が充実している」「将来や、やりたい仕事のイメージがある」「この高校の生徒の評判はよいと思う」「さまざまな問題を解決する力がある」「人間関係をうまく持てる」「問題を見つけることができる」である。

奉仕体験活動は一人で行うものではなく、受け入れ先の方たちと共同して活動を行う。「グループで活動することができる」の数値が高くなったのは共同作業による学びの結果ではなかろうか。さらにこうした活動によって自己の「問題発見解決能力」を高め、自分たちの「毎日が充実」し、自己評価として「この学校の生徒の評判はよいと思う」と捉えられているのかもしれない。「社会

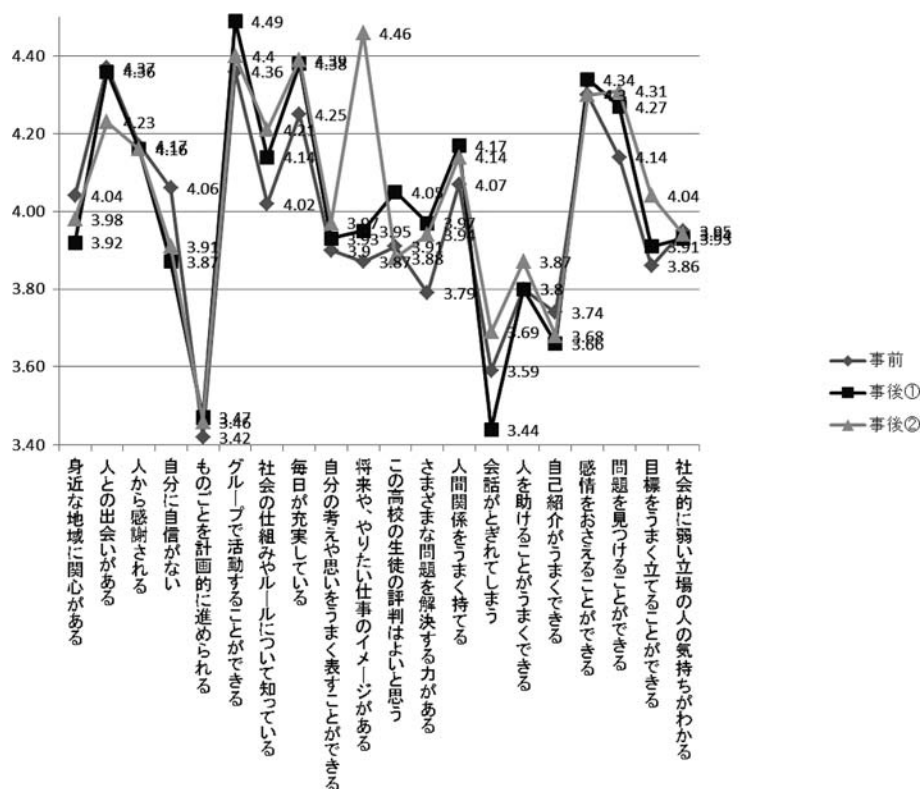


図1 教科「奉仕」の態度や行動についての平均値(加重平均)

の仕組みやルールについて知っている」ことについては、東京都教育ビジョンにある「規範意識」「公共心」が身についた表れであるかもしれない。以上の変化から、自己肯定感、コミュニケーション能力、問題発見解決力、グループ活動能力、規範意識・公共心について高まったと言えるかもしれない。

逆に数値が下がったのは「身近な地域に関心がある」「会話が途切れてしまう」「人を助けることができる」である。「会話が途切れてしまう」については数値が低く出ていることから受講生は奉仕体験活動によって自己肯定感やコミュニケーション能力を高めたと考えられる。また「人を助けることができる」については実際の活動を通じ人を助けることは簡単なことではないことを学んだ結果であるかもしれない。

一方、あまり変化がなかったのは「人から感謝される」「ものごとを計画的に進めることができる」「自分の考えや思いをうまく表すことができる」「人間関係をうまく持てる」「自己紹介がうまくできる」「感情を抑えることができる」「社会的に弱い立場の人の気持ちがわかる」であった。これらの結果から人間関係を円滑にする能力や計画的に物事を進める能力は教科「奉仕」での活動を通じてあまり身に着かなかったのかもしれない。また東京都教育ビジョンでは、「他人に共感し、社会の一員であることを実感し、社会に役立つ喜びや、勤労の大切さなどを知る人間」をねらいとしているが、「社会的に弱い人の立場がわかる」「人から感謝される」といった項目が高まっていないことから「共感」や「役立つ喜び」については教科「奉仕」は影響があまりないようである。

さらに体験1年後（事後②調査）と比較すると、特に高まっている項目として「将来や、やりたい仕事のイメージがある」があげられる。これは教科「奉仕」での学びよりも、進路・就職などのキャリア教育での指導の影響と考えられる。その他に高まっている項目としては「社会の仕組みやルールについて知っている」「目標をうまくたてる」などがあるが、逆に「人から感謝される」「ものごとを計画的に進められる」「自己紹介がうまくできる」「社会的に弱い立場の人の気持ちがわかる」など体験前とほとんど数値に変化がない項目や、「この高校の評判はよいと思う」「人との出会いがある」など体験後よりも体験1年後の方が、数値が下がる項目もある。全体的には教科「奉仕」受講直後と1年後の数値はほとんど変化がないようである。

まとめると、C高校での教科「奉仕」受講による受講生の態度や行動は、自己肯定感、コミュニケーション能力、問題発見解決力、グループ活動能力、規範意識・公共心について高まっている一方、人間関係を円滑にする能力や計画的に物事を進める能力、人へ共感や人に役立つ喜びについては高まっておらず課題となっているようである。さらに体験1年後との調査比較から教科「奉仕」での学びがその後の学習などを通じてあまり深まっていないようである。

3-2. 態度や行動に関与する活動

前述の態度や行動は受講生のこれまでの活動や教科「奉仕」での体験内容、事前学習や事後学習とどのような関係にあるのであろうか。以下では、小学校・中学校のボランティア活動経験と事前調査の関係、実際の活動先や事前学習・事後学習と事後①調査の関係、教科「奉仕」受講後のボランティア活動と事後②調査の関係から、態度や行動に関与する活動について見ていきたい。

3-2-1. 小・中学校のボランティア活動経験

我々が行った分析によれば³⁾、小学生時にボランティア活動経験がある人は94名（52.8%）で約

半数の人が「活動経験がある」と回答している。その内容は「自然・環境保護に関する活動」が 61 名 (33.9%), 次いで「地域での活動」が 40 名 (22.2%), 「社会福祉に関する活動」 22 名 (12.2%) である。同じく、中学生時にボランティア活動経験がある人は 79 名 (43.9%) で小学生より活動経験がある人が少なくなっている。その内容は「自然・環境保護に関する活動」が 39 名 (21.7%), 次いで「地域での活動」が 29 名 (16.1%), 「社会福祉に関する活動」 17 名 (9.4%) である。小学校時と中学校時のボランティア活動経験をクロスさせてみたところ、小学校で経験がある人 (90 名中) で中学校でも経験がある人が 55 名 (61.1%) 中学校では経験がない人が 35 名 (38.9%) であった。また小学校で経験がない人 (83 名中) で中学校では経験がある人は 25 名 (30.1%) 経験がない人は 58 名 (69.9%) であった。すなわち、小学校で経験した人に中学校でも経験した人が多く、逆に小学校で経験していない人は中学校でも経験のない人が多い。カイ自乗検定でも 1% 水準で有意差があった (大東他 2014: 149-150)。

3-2-2. 態度や行動との関連性

それでは小・中学校のボランティア活動経験は教科「奉仕」での奉仕体験活動前の態度や行動にどのように関連しているのだろうか。

小学校のボランティア活動経験と態度や行動との相関 (表 2) では、1% 水準で有意となったのは、「身近な地域に関心がある」「社会の仕組みやルールについて知っている」「自分の考えや思い

表 2 ボランティア活動経験と態度や行動との関係 (Spearman のロー)

	小学校の活動体験 有意確率 (両側)	中学校の活動体験 有意確率 (両側)
身近な地域に関心がある	0.002**	0.010*
人との出会いがある	0.152	0.001**
人から感謝される	0.553	0.215
自分に自信がない	0.987	0.752
ものごとを計画的に進められる	0.873	0.420
グループで活動することができる	0.266	0.091
社会の仕組みやルールについて知っている	0.005**	0.574
毎日が充実している	0.908	0.478
自分の考えや思いをうまく表すことができる	0.094**	0.397
将来や、やりたい仕事のイメージがある	0.001**	0.015*
この高校の生徒の評判はよいと思う	0.057*	0.015*
さまざまな問題を解決する力がある	0.155	0.962
人間関係をうまく持てる	0.373	0.780
会話がとぎれてしまう	0.595	0.993
人を助けることがうまくできる	0.506	0.431
自己紹介がうまくできる	0.038*	0.065
感情をおさえることができる	0.312	0.698
問題を見つけることができる	0.028*	0.422
目標をうまく立てることができる	0.086	0.681
社会的に弱い立場の人の気持ちがわかる	0.010*	0.074

**P<0.01 *P<0.05

をうまく表すことができる」「将来や、やりたい仕事のイメージがある」であり、5% 水準で有意となったのは「この高校の生徒の評判はよいと思う」「自己紹介がうまくできる」「問題を見つけることができる」「社会的に弱い立場の人の気持ちがわかる」である。実際の平均値から見ると小・中学校でのボランティア活動経験がある受講生の方がより「身近な地域に関心があり、その地域のルールを知っている」と回答しており、活動によって「初対面でも物おじせず、人との共感能力を持ってコミュニケーションを行い、問題を発見できる」と回答している。これはボランティア活動を通じた様々な経験の結果なのではなかろうか。さらに活動の成果を実際に感じ取ることで「将来や、やりたい仕事のイメージがある」という将来像の具体化につながっているかもしれない。

次に、中学校のボランティア活動経験と態度や行動との相関（同 表 2）では、1% 水準で有意となったのは、「人との出会いがある」であり、5% 水準で有意となったのは「身近な地域に関心がある」「将来や、やりたい仕事のイメージがある」「この高校の評判はよいと思う」である。実際の平均値から見ると中学校でのボランティア活動経験がある受講生の方がより「身近な地域で人との出会いがあり」そのことで、将来像が具体化され、また進学高校選択にもボランティア活動経験が生かされているようである。

まとめると、小・中学校のボランティア活動経験はある項目において態度や行動と関係しており、経験者は身近な地域に関心を持ち人との共感能力を持ってコミュニケーションを行い、問題を発見する能力を持ち、活動を通じて具体的な進路を描くことができているようである。

3-2-3. 事前学習・事後学習・活動先について

教科「奉仕」の学習は、事前学習、奉仕体験活動、事後学習のプロセスがある。本調査では活動先と事前学習と事後学習の学びについて、事後学習終了後の調査（事後①調査）を行った。

先行した報告では、事前学習において受講生が中心とした学習は、「活動先の人の話を聞く」109 名（63.4%）、「先生の授業を聞く」44 名（25.6%）の 2 項目で全体の 9 割弱となっている。また事前学習によって活動先のことが理解できたのかについては、159 名（88.8%）と 9 割弱の人が理解できたと答えている。以上から概ね事前学習については学習効果があったと考えられる。また、事後学習において受講生が中心とした学習は「活動先のことをグループで発表する」75 名（41.7%）、「活動先のことをグループで調べる」70 名（38.9%）であった。実際にはこの両者が一連のこととして受講生には捉えられている。こうした事後学習によって活動したことを十分ふりかえることができたのかについては、163 名（92.6%）と 9 割強の受講生がふりかえることができたことと捉えており、グループによる調べ学習と発表の組み合わせは有効な学習効果を生んでいると考えられる（大東他 2014：150-151）。

奉仕体験活動の活動内容については、「地域での活動」82 名（43.9%）「社会福祉に関する活動」67 名（35.8%）「自然・環境保護に関する活動」41 名（21.9%）の順となっている。小・中学校でのボランティア経験と比較すると、「地域での活動」や「社会福祉に関する活動」が多くなっていること、特に「体育・スポーツ活動」や「イベントの手伝い」といった小・中学校時にはほとんど見られない活動が多くなっていることが特徴としてあげられる。これは C 高校の奉仕体験活動が部活動単位を主としているため、スポーツ系部活動と連動した中学生以下の子どもたちへの指導、自分たちが出場しない競技大会や演奏会というイベントの手伝いが活動として行われていることがあげられる（大東他 2014：151-152）。

3-2-4. 態度や行動との関連性

それでは事前学習・事後学習や活動内容は教科「奉仕」受講後の態度や行動にどのように関連しているのだろうか。

事前学習と態度や行動の相関（表3）では、「人との出会いがある」「人から感謝される」「毎日が充実している」「問題を見つけることができる」「目標をうまく立てることができる」が1%水準で有意となり、「身近な地域に関心がある」「グループで活動することができる」「社会の仕組みやルールについて知っている」「自分の考えや思いをうまく表すことができる」「会話がとぎれてしまう」「人を助けることがうまくできる」「自己紹介がうまくできる」「社会的に弱い立場の人の気持ちがわかる」が5%水準で有意となった。さらに事後学習との相関では「自分に自信がない」の項目を除き、すべての項目において5%以上の水準で有意となり、事前学習後における態度や行動と比較してより強い相関となっている。このことから総じて事前学習・事後学習と態度や行動は関係しているといえるであろう。

他方、活動内容と態度や行動との相関をみたところ、「社会福祉に関する活動」（67名）において「この高校の評判はよいと思う」が1%水準において有意な差があり、「自然・環境保護に関する活動」（41名）において、「グループで活動することができる」の項目が5%水準において有意に、「イベントの手伝い」（33名）の活動で「ものごとを計画的に進められる」「社会の仕組みやル

表3 事前学習・事後学習と態度や行動の関係（Spearman のロー）

	事前学習で、活動先のことを十分に理解できましたか。	事後学習では、活動したことを十分にふりかえることができましたか。
身近な地域に関心がある	0.181*	0.319**
人との出会いがある	0.249**	0.397**
人から感謝される	0.195**	0.365**
自分に自信がない	-0.035	-0.065
ものごとを計画的に進められる	0.102	0.213**
グループで活動することができる	0.186*	0.401**
社会の仕組みやルールについて知っている	0.149*	0.251**
毎日が充実している	0.197**	0.284**
自分の考えや思いをうまく表すことができる	0.184*	0.343**
将来や、やりたい仕事のイメージがある	-0.009	0.176*
この高校の生徒の評判はよいと思う	0.156*	0.256**
さまざまな問題を解決する力がある	0.133	0.240**
人間関係をうまく持てる	0.124	0.240**
会話がとぎれてしまう	-0.171*	-0.251**
人を助けることがうまくできる	0.192*	0.253**
自己紹介がうまくできる	0.170*	0.334**
感情をおさえることができる	0.046	0.153*
問題を見つけることができる	0.247**	0.386**
目標をうまく立てることができる	0.199**	0.377**
社会的に弱い立場の人の気持ちがわかる	0.190*	0.218**

**P<0.01 *P<0.05

ールについて知っている」「この高校の評判はよいと思う」「人間関係をうまく持てる」「人を助けることがうまくできる」の項目が5%水準において有意であった。

「社会福祉に関する活動」は高齢者や障がい者施設でのサポートや幼稚園・保育園でのサポートであり、受講生が実習を行った施設は高校の近隣の施設である。施設でC高校の話聞くことで自校の評価が高くなった可能性がある。「自然・環境保護に関する活動」は清掃などグループで行う活動が多いため、グループ活動の能力が高まったのではなかろうか。「イベントの手伝い」に関する活動はC高校の活動が部活動連携型となっているため自分たちが参加しないスポーツ大会やお祭りなどである。こうした活動は計画性を伴い短期間で結果を出さなければならない活動である。そのため組織的に活動することが必要となり、計画性や社会のルールを知る、人間関係をうまく持てるなどの能力が高まっていると考えられる。特に「イベントの手伝い」は自分たちが当事者として参加する可能性がある大会などが多い。こうした活動がどのように運営されているのかを知ること、特徴的な活動の学びが出てきているとも言える。

まとめると、過去のボランティア経験の有無にかかわらず、教科「奉仕」の受講を通じ、活動の事前学習・事後学習と、態度や行動とが関連すると言えるであろう。さらに活動内容によって態度や行動の向上に違いがあるため、受講生がどのような能力を身につけたいかによって、活動先を選択できることが重要なことになるのかもしれない。

3-2-5. 教科「奉仕」受講後のボランティア活動

本調査では教科「奉仕」受講終了から約1年後に同一の質問紙を使用して態度や行動の調査を行っている（事後②調査）、この調査ではこの間に行ったボランティア活動と態度や行動との関係を検討するために、教科「奉仕」受講後の2年生時にボランティア活動を行ったかどうか、その活動内容や活動形態について質問を行った。先行したまとめによれば、受講生のうち2年生でボランティア活動を行った人は77名（41.2%）であり、受講生の約4割の人がボランティア活動を行っている。その活動内容をみると、奉仕体験活動内容に比べて、「自然・環境保護に関する活動」が増加し、「社会福祉に関する活動」「地域での活動」が減少している。また奉仕体験活動以前と比較して「体育・スポーツ活動」や「イベントの手伝い」が多くなっている。これは2年生のボランティア活動の形態がボランティアサークル以外の課外活動が多く、C高校が部活動と連携して奉仕体験活動を行っているために、2年生以降も当該部活動のボランティア活動を継続していると解釈できる（大東他2014:153）⁴⁾。

3-2-6. 態度や行動との関連性

それでは、教科「奉仕」受講後のボランティア活動は、態度や行動とどのような関係があるのだろうか。受講後にボランティア活動を行ったかどうかと態度や行動との相関では、いずれの項目も有意な差はなかった。ボランティア活動内容では、「体育・スポーツ活動」（20名）において、「人との出会いがある」が5%水準で有意であった。「イベントの手伝い」（14名）において、「毎日が充実している」が5%水準で有意であった。そのボランティア活動形態では、「ひとりで行った活動」（10名）において「身近な地域に関心がある」が5%水準で有意であった。

「体育・スポーツ活動」はC高校においては部活動ごとの小・中学校への競技の指導という形で行われていることが多いが、その活動を通じ影響を与える人との出会いがあることが示唆される。またC高校の教科「奉仕」受講後のボランティア活動は当該部活動と連携して行われていること

が多いが、特にスポーツ系の部活動との連携において、新たな人との出会いがあるのかもしれない。また「ひとりで行った活動」は元々「身近な地域に関心がある」人が自発的に活動した結果なのかもしれない。

まとめると、2年生のボランティア活動は全体としてあまりその後の態度や行動と関係していないが、スポーツ系の部活動と連携した活動に新たな人との出会いがあることが特徴としてあることが示された。

3.3. まとめ

第一に、C 高校の教科「奉仕」受講生の態度や行動については、自己肯定感、コミュニケーション能力、問題発見解決力、グループ活動能力、規範意識・公共心については高まっていると考えられる。一方、人間関係を円滑にする能力や計画的に物事を進める能力、人へ共感や人に役立つ喜びについては高まってはいない。さらに体験1年後との調査比較から教科「奉仕」での学びがその後の学習などを通じてあまり深まっていないようである。(以上、3.1.)。

第二に、受講生の小・中学校でのボランティア活動経験と態度や行動は関係しており、経験者は身近な地域に関心を持ち人との共感能力を持ってコミュニケーションを行い、問題を発見する能力を持ち、活動を通じて具体的な進路を描くことができているとも考えられる(以上3.2.2)。

第三に、過去のボランティア経験の有無にかかわらず、教科「奉仕」の受講を通じ、活動の事前学習・事後学習の実施は、受講生の態度や行動の向上と関係していると言えるであろう。さらに活動内容によって態度や行動の向上に違いがあるため、受講生がどのような能力を身につけたいかによって、活動先を選択できることが重要なことになるのではなかろうか(以上3.2.4.)。

我々の研究においても、サービス・ラーニングにおけるふりかえり(リフレクション)の重要性が再三指摘されていることをまとめた(富川他2008)。今回の調査によって、全学必修のサービス・ラーニングにおいても、事後学習でのふりかえりを行うことが、受講生の理解を定着させ、主観的態度や行動の向上につながる可能性を指摘したい。

第四に、教科「奉仕」受講後のボランティア活動経験は全体としてあまりその後の態度や行動と関係していないが、スポーツ系の部活動と連携した活動に新たな人との出会いがあることが特徴としてあることが示された(以上、3.3.6)。

既に行った教員に対するインタビューから、教員が考える教科「奉仕」の学習効果として第一に、学校外の地域の人との接点をもつことで出会いや交流が生まれ、立場の異なる人々との意見交換を通じ、他者理解の可能性を秘めている。第二に、地域社会の人々から感謝されることによって社会に役立つ喜びが得られ、自己肯定感や社会の一員としての自覚が生まれる。第三に、規範意識や公共心が芽生える。第四に、地域社会への関心から、地域社会に貢献する行動を生徒自らが行うきっかけになることが教科「奉仕」の学びであるとまとめたが(大東2010)、受講生自身も自己肯定感、コミュニケーション能力、問題発見解決力、グループ活動能力、規範意識・公共心を身につけることが示唆された。

4. 要約と課題

この小論の目的は、サービス・ラーニングを通じた態度や行動の変化について、東京都立高等学

校の教科「奉仕」受講者に対するアンケート調査から検討することにある。東京都立 C 高校において、「奉仕」活動の事前と見込まれる 2011 年 7 月（事前調査）と、事後と見込まれる同年 12 月（事後①調査）及び、「奉仕」活動実施 1 年後の 2013 年 2 月（事後②調査）に、受講生に対するアンケート調査を行った結果、①C 高校の教科「奉仕」によって受講生は自己肯定感、コミュニケーション能力、問題発見解決力、グループ活動能力、規範意識・公共心について高めている一方、人間関係を円滑にする能力や計画的に物事を進める能力、人へ共感や人に役立つ喜びについては高めていないと考えている。②教科「奉仕」受講前のボランティア活動は態度や行動と多様な関係があるが、教科「奉仕」受講後の態度や行動は、教科「奉仕」の奉仕体験活動に伴う事前学習と事後学習の理解度によって向上する可能性がある。③教科「奉仕」受講後のボランティア活動経験は全体としてあまりその後の態度や行動と関係していないようである。

今回の報告は、数ある東京都立高校の 1 事例にすぎない、今後は他の都立高校においても同様の結果がみられるのか、特に事前学習と事後学習の内容によって、受講生の態度や行動がどう変化するのかについて検討を行いたい⁵⁾。さらに、今回の報告は主観的な「態度や行動」についての分析であり客観的能力との関連についても今後検討を行いたい。

注

- 1) 東京都立高校のサービス・ラーニングの研究については、二宮匡樹他（2008）、宮崎猛（2011）などがある。
- 2) 我々のグループは先行して都立高校 3 校のデータによる総合的な分析も行っている（大東他 2012）。
- 3) 本論は大東他（2014）で展開したボランティア活動イメージの変化についての考察の続編にあたる。2 章以降で言及するボランティア活動経験や事前学習・事後学習などの単純集計については大東他（2014）にてより詳しく言及している。
- 4) 著者らは C 高校における課外活動と連携した奉仕体験活動について参与観察を行ったが、教科「奉仕」受講生以外に、当該課外活動メンバーである 2 年生も活動に参加している。
- 5) 同時期に調査を行った都立高校の分析は富川拓他（2017）も参照のこと。

参考文献

- 菊池章夫, 1988, 『思いやりを科学する』, 川島書店, 212.
- 菊池章夫・長濱加那子, 2008, 「KiSS-18 の妥当性についての一資料」, 『尚絅学院大学紀要』, 56, 261-264.
- 宮崎猛, 2011, 「社会奉仕体験活動の展開への示唆－米国サービス・ラーニングをめぐる議論に着目して」『創大教育研究』20: 1-20.
- 二宮匡樹・飯田潤子・古屋茂樹・砂川博美・山田幸恵・村尾数馬・泉洋一・建部宗克, 2008, 「よりよい奉仕体験活動の研究と提案：都立高校必修教科「奉仕」へのプラン提案と協同実践を目指して（研究活動助成制度に基づく論文・発表・制作）」『創大教育研究』17: 79-92.
- 大東貢生・富川拓・柴田和子・古川秀夫・山田一隆, 2010, 「日本におけるサービス・ラーニングの展開Ⅲ－ボランティアやサービス・ラーニングによる他者理解に向けて－」『佛大社会学』34: 46-52.
- 大東貢生・富川拓・山田一隆・古川秀夫・柴田和子, 2012, 「日本におけるサービス・ラーニングの展開Ⅵ－教科「奉仕」受講生に対するアンケート調査から－」『日本福祉教育・ボランティア学習学会第 18 回いばらき大会報告要旨集』: 118-119.
- 大東貢生・富川拓・古川秀夫・山田一隆, 2014, 「日本におけるサービス・ラーニングの展開 (8)－部活動連携型の奉仕体験活動が及ぼす影響－」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』16: 145-156.
- 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課, 2006, 『「奉仕」カリキュラム開発委員会報告書～奉仕体験活動の必修化に向けて～』東京都教育委員会.
- 富川拓・柴田和子・大東貢生・古川秀夫, 2008, 「サービス・ラーニングの研究と実践をめぐる諸課題」『佛大社会学』32: 9-18.

- 富川拓・大山治彦・柴田和子・古川秀夫・大東貢生, 2009, 「日本におけるサービス・ラーニングの展開 I ～東京都立高校における必修科目「奉仕」の創設について～」『佛大社会学』33: 41-46.
- 富川拓・大東貢生・古川秀夫・柴田和子, 2017 「日本におけるサービス・ラーニングの展開 (9) - 活動先選択型の奉仕体験活動が及ぼす影響 -」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』19: 179-187.
- 山田明, 2008, 『サービス・ラーニング研究: 高校生の自己形成に資する教育プログラムの導入と基盤整備』学術出版会.
- 山田一隆・井上泰夫, 2009 a, 「ボランティア活動を通じた学生の「学び」のイメージ—2007 年度立命館大学学生意識調査を事例として」, 『立命館人間科学研究』19: 59-75.
- 山田一隆・井上泰夫, 2009 b, 「ボランティア活動から学生は何を学ぶのか——2007 年度立命館大学学生調査を事例として」, 桜井政成・津止正敏 [編], 『ボランティア教育の新地平』, ミネルヴァ書房, 21-50.

付記

この研究は平成 26 年度龍谷大学国際文化研究所研究「サービス・ラーニングの長期的影響」プロジェクト助成, 及び科学研究費助成事業 (課題番号: 22530584, 15 K 03892) の成果の一部である。